

「RSL-ローカル(地域共生)」とその先にある学び —みんなに優しい町「熊谷」—

コミュニティ福祉学部
スポーツウェルネス学科
中村 愛実
(2022 年度履修)

I. 履修の動機

私が高校 2 年生の冬から、新型コロナウイルス感染症の影響でオンラインでの生活が日常になった。行動を制限され社会とのつながりが希薄になり、孤独で不安な時を経験した。それを機に、大学生活ではこれまでとは異なる新たな環境に身を置き視野を広げたいと考えるようになった。しかし大学に入学しても、まだ新型コロナウイルスの感染拡大が収まらず行動制限が続くなかで、期待していたようには学部・学科の友人や部活動のメンバーと交流できる場や機会は得られなかった。そこで、合宿形式での現地活動がある「RSL-ローカル(地域共生)」(以下、「RSL 地域共生」)の存在を知り、深いつながりを持てる友達が作れると心が躍った。

「RSL 地域共生」では、埼玉県熊谷市内で農福連携に取り組むソーシャルファームである埼玉福興株式会社(以下、埼玉福興)と「地域を食でデザインする」をコンセプトに活動する有限会社 PUBLIC DINER(以下、PUBLIC DINER)の活動に参加し、しょうがい者をはじめとする多様な人々がウェルビーイングな社会の実現を軸につながり誰もが幸福に持続可能な社会で暮らせる方法について体験的に理解を深めることを目標としている。ここでいう「ウェルビーイング(well-being)」とは身体的・精神的・社会的にも良好な状態—すなわち一人ひとりが自分自身の認識や感覚によって把握する「主観的ウェルビーイング」を表しているが、私はこの概念を学部の授業で学んだ当時、コロナ禍でのつながりの希薄化による孤独や不安から、自身のウェルビーイングは良好ではないと感じていた。そこで、損なわれた私のウェルビーイングも新しい環境でのつながりを経て向上させたいという想いで本科目の履修を決意した。

II. 履修中の学び

4 泊 5 日の学外活動では、埼玉福興や PUBLIC DINER の圃場で水耕栽培、野菜や藍の収穫などの活動をおこなった。埼玉福興の代表である新井利昌さんは、「一番弱い人の『働く』を考えれば、誰でも暮らしやすい社会を作れる」とおっしゃり、農業を通してしょうがい者や過去に罪を犯した人の社会参加の機会を作っている。しょうがい者や罪を犯した人の“できる”を見つけ居場所や生きがいを作ることは、障害というレッテルで見逃されがちな可能性を拾い、誰もが社会的に健康となる働きである。彼らとのコミュニケーションを通して、新井さんが作る肯定的な空間で働くことが、自分がそこに存在する社会的意義を感じているように見えた。



【しょうがい者の方から仕事を教わる】
(右側に写っている女性が筆者)

PUBLIC DINER の経営者でもある科目担当の加賀崎勝弘先生は、初回授業からずっと私たちに「まとまっていないぐちゃぐちゃの感情や考えをそのままアウトプットすることが、既存の言葉でまとめない、借りものでない自分と対話するチャンスである」とおっしゃっていた。事前学習ではアウトプットの練習のためにゲストスピーカーとして随筆家の山本ふみこさんが来てくださり、“失敗の価値”について学んだ。人前で発言する際、自分の意見や表現に誤りがないか不安になり、綺麗でありきたりな言葉をあてはめ真意を隠してしまう。「難しい言葉を使うのは防衛的。感じたそのままを新しい言葉で伝えよう。失敗の積み重ねですべてはできている」と失敗を失敗と捉えない大切さを教えていただいた。ふみこさんには随筆の添削もしていただいたが、日常で感じたそのままの思いを綴った経験がフィールドワークでの出来事を多面的に捉え自分の言葉で伝える力になったと感じている。

上記の加賀崎先生の言葉をもとに、毎回の授業終わりにその日に感じたこと、考えたことに関してぐちゃぐちゃの状態コメントを残した。このコメントの機会は自分とは何かを知る大切な時間であった。受験や就活など、私たちの多くは将来のためにその時の最善を尽くす。それは自分の意思だけでなく親やまわりの期待を多く含んだ行動である。私の場合、それが本来重要な自分の気持ちに制限をかけ、まわりから見える完璧な自分を守ることに全力であった。しかし、フィールドワークで活動を共にした埼玉福興のしょうがい者の方々は自分の考えをダイレクトに伝え、やりたいことに対して自分の“できる”を最大限に発揮していた。その姿に、私は心を動かされた。

それを特に感じたのは「SOCIAL & PUBLIC」(PUBLIC DINER と埼玉福興の合同レーベルであり、活動体の名称)のロゴ作りと一緒に取り組んだことのであった。しょうがい者のるみさんは、製作の過程で、新井さんや学生からデザインについて多くのアドバイスをもらっていた。しかし、るみさんは、「こうするの！」と自分の思い描く完成を目指してデザインの軸をずらさずに取り組み続けた。その結果、個性的でるみさんだけが表現できる唯一無二のデザインが完成した。誰かの理想ではなく、自分の理想を求めて貫いた作品が、皆に賞賛される。その個人を貫く力強さや勇敢さは根拠のないものであったかもしれないが、ただ自分を信じる大切さを教えてくれた。そして、私がこれまで自分を信じられなかったことを後悔するとともに、何か変えたいという漠然とした心境の変化を感じた。



【出来上がったロゴを披露する るみさん】

夜のミーティングでその日に感じたことをシェアした際、私は「誰かから見た完璧ではなく、自分の意思を優先し貫いてみたい」とロゴ作りで感じた心境の変化を、落とし込めていない思考をアウトプットしながら、初めて自分自身の思いを理解した。私以外のメンバーもその日に感じたことシェアすることを通して自分自身と対話していた。今振り返ると、それは、どんなコメントも肯定してくれる環境であったからこそ、ありのままの自分たちを出すことができたのだと思う。フィールドワークという普段とは異なる環境で刺激を受け、ぐちゃぐちゃでまとまりのない感情を言葉にする機会が、本当の自分を見つける大切なきっかけとなった。

<温かさを感じる>

学外活動中の夜、自由時間にメンバーとしたダイアログ(対話)はコロナ禍で失ったつながりを深める濃い

時間だった。大人になる手前、選択を迫られる中でそれぞれが不安や悩みを抱えていた。その中で多くの刺激を得て自分と向き合う時間が多かった5日間。言葉にならない感情が何度も沸き起こり、夜、数人でそのぐちゃぐちゃな感情をぐちゃぐちゃな状態のまま吐き出し整理しあった。私にとってこの時間は、お互いの悩みをさらけ出し、それに対して一緒に悩みあえる温かいつながりであった。履修後もメンバーで熊谷を再訪問し、その度に居場所があることの温かさを感じている。

Ⅲ. 履修後の活動—みんなに優しい町「熊谷」—

メンバーとの再訪問に限らず、母に熊谷を案内したり、加賀崎先生と新井さんが主催された「ケアリングフードを学ぶ会」にも参加したり、東京大学が主催するコンペ「COG2022」にて熊谷での子ども食堂企画を提案しグランプリを受賞したことで市長の表敬訪問をするなど、私は何度も熊谷を訪れた。

なぜ、これほど熊谷を訪れるのか。それは、私の“好き”(興味)が熊谷にあり、それを誰かに伝えたいからだと確信している。

熊谷は皆に優しい町である。

加賀崎先生がオーナーを務める PUBLIC DINER をはじめとした飲食店は、オーガニック食材の使用が基本で、埼玉福興など地元熊谷や埼玉県内で生産された野菜をふんだんに使ったメニューが豊富である。「体をキレイにして帰ってほしい」と普段カップラーメンなど添加物が入った加工食品を摂取しがちな学生に、加賀崎先生は5日間で栄養たっぷりの食事を提供してくれた。PUBLIC DINER で食べた野菜は、野菜が苦手な学生が克服できるほど工夫して調理されており、大変美味しかった。私は、元々、できるだけ自然の状態に近い食材で作られたクリーンな食事が好きであったため、その感動を母に伝えたかった。また、母は普段、日中から夜遅くまで働き十分な食事をとれていないため、この栄養満点で美味しい料理を食べてほしかった。

「ケアリングフードを学ぶ会」に参加したのも同じような考えからだ。私が所属する大学のサッカー部にアレルギーを持つ友人がおり、食事の際は申し訳なさそうにお店を選んだり、周りに遠慮し食べなかったりと食事を十分に楽しめていなかった。また、私もクリーンな食事を日常生活の中ですることに難しさを感じていたため、食事制限がある人もない人も皆で同じ料理を美味しく食べられるケアリングフードを体感し、多くの人にその美味しさを伝え普及させることで、食事に困難を抱える人たちも楽しめる環境を作りたかった。会に参加し、共通の“好き”(ケアリングフード)から新たなつながりもできた。「ケアリングフードを学ぶ会」で出会った THE PUBLIC スタッフの藍原さんと、ケアリングフードを提供して下さった藤春幸治さんが経



【「COG2022」でオープンガバナンス総合賞を受賞】

(右側に写っている女性が筆者)

営するレストランエピキュールに、誰もが食事を楽しめる環境を再度体感しに行った。やはり、好きなものに共感しあいながら過ごす時間は非常に幸せであった。

正課外活動として取り組んだ「COG2022」で子どもを対象にした企画を提案したのも、子どもが好きで子どもの問題に興味があったからである。「COG2022」(「チャレンジ!!オープンガバナンス 2022」)は、東京大学公共政策大学院が主催しており、行政の提出した地域課題に対して、生徒・学生・市民がデータを基に課題を分析し、解決方法を行政に提案する大会である。私たちは、熊谷市にあるリソースをもとに「全国初!地域内の全小学校区での子ども

も食堂開催を実現」を提案し、グランプリに相当するオープンガバナンス総合賞を受賞することができた。私は、以前から地元の子ども食堂に参加しており、子ども食堂が本当に必要な子どもに認知されているのか不安であった。そのため、子ども食堂の認知を広げるためにもプレゼンテーションの準備や当日の発表に積極的に参加した。熊谷市では「熊谷なないろ食堂」などの団体がすでに活動しており、全小学校区における子ども食堂の同時開催といった新しい試みを行う環境が十分であると感じていたため、受賞し本格的に活動できることに喜んだ。

なお、「RSL 地域共生」は 2022 年度にはじまった新しい授業であるが、2023 年度には 2 期生を迎え、そのメンバーたちが「ポール・ラッシュ博士記念奨学金」を受給し子ども食堂の実現に中心となって尽力してくれた。この活躍もあり、2024 年 2 月に PUBLIC DINER で行った子ども食堂は 100 名以上の参加者を迎えることができた。そして、埼玉福興で作られた無農薬の野菜を学生も参加して調理し、地域のご家族や常連のお客さんや行政の方が栄養満点の料理を囲み団らんした。この企画の目的であったコミュニティの形成ができたことに達成感を得た。まだ、本当にこの場所を必要とする子どもには届いていないかもしれない。しかし、子ども食堂を継続することでネットワークが広がり、皆の居場所として全小学校区に子どもの貧困を解決する場所ができるようにしたい。



【2024 年 2 月に開催した子ども食堂の様子】

このように、私を動かす“好き”という衝動の先には、食事を通して、誰もが楽しく、健康になれて、そして誰もの居場所となりうる、皆に優しい町熊谷の魅力があった。

IV. 振り返って今、考えていること

授業や正課外活動としての「COG 2022」、プライベートでの再訪問、子ども食堂の実現を経て、熊谷で多くの人と出会い多様な価値観や考えを知った。

授業を共にしたメンバー、加賀崎先生をはじめとする PUBLIC DINER の皆さん、新井さんをはじめとする埼玉福興の皆さん、山本ふみこさん、「ケアリングフードを学ぶ会」でお会いした皆さん、子ども食堂の実現で繋がった 2 期生の皆さん。皆さんと関わる中で、それぞれの経験で得た物事の捉え方が私の価値観や考えを広げる刺激になった。

例えば履修前、私は部活動のコミュニティで、考え方の違いはチームの団結力を阻害するもののように感じ、受け入れることができなかった。しかし、RSL でのつながりを通して異なる価値観と向き合った際、それを受け入れることが物事を多面的に捉えることにつながると知った。人とのかかわりにおいて、一面だけでなく、異なる面を理解する重要性を学んだ。

私にとって、熊谷での経験が人とのつながりを今後も豊かにしてくれると確信している。